

義兄医師に毎日アナル処置 される柔道部4年の在宅療養 カルテ

在宅療養患者・朔の継続観察記録

体 験 版

1

第1話 初診

義兄に身体の中を指で押されて、俺は勃った。

22年生きてきて、初めての経験だった。

俺の名前は朔。N大法学部の4年だ。柔道部時代は全国大会の個人戦ベスト16まで行った。身長178cm、体重72kg、肩幅も胸板も鍛えてある。組み技なら、たいていの男には負けない。

その俺が今、衛医院の診察台の上で、四つん這いになっている。

義兄の衛の指が、俺の中にある。

かつての俺なら、義兄の指が身体の中に入ってきた瞬間、関節技で投げ飛ばしていただろう。だが今の俺には、抵抗の手段が物理的に存在し

ない。

両親はドバイにいる。

両親の帰国予定は、あと6か月。あと6か月、
この家にいる。

時間を、3時間ほど巻き戻す。

スーツケースの車輪が、玉砂利の上で止まっ
た。

眼の前に、白い門柱が立っている。

「衛医院」と彫られた真鍮の表札が、午後の
光に鈍く光っていた。

高級住宅地。隣家との距離は10m以上ある。

空は青く、雲は薄い。

絵に描いたような、穏やかな午後だった。

俺の手には、スポーツドリンクのペットボトルが握られている。

柔道部時代から続く癖だ。試合前も、移動中も、これを握っていれば落ち着く。

半分ほど中身が減っていた。電車で飲んだ分だ。

玄関の引き戸が、音もなく開いた。

白衣の男が立っていた。

黒縁の眼鏡。後ろに撫でつけた髪。笑わない口元。

義兄の衛だった。

「お帰りなさい」

「……ども」

俺は会釈もせずに、ボトルを片手で持ち直した。

衛とは年に数回しか会わない。中学生のときの再婚以来、向こうから歩み寄ってきた記憶もない。義兄と弟。そういう書類上の関係でしかなかった。

両親はドバイにいる。

父の商社の赴任が決まったのは、半年前だ。
母は実母を亡くしていた俺の父と再婚し、衛は俺の父を「父さん」と呼ぼうとしない。それで

も書類上の家族として、海外赴任に同行した。

俺の住居は、衛宅に集約された。

実家のマンションは引き払われた。

俺は半年前から、大学近くのワンルームに、ひとりで住んでいた。賃貸契約の連帯保証人欄には、両親出国の手続きの一環として、衛の名前が入っていた。家賃の振込口座も、衛の管理に、移されていた。

先週、管理会社から、俺の元に、解約通知が届いた。

俺は、解約申請をしていなかった。

管理会社に電話した。先方は、連帯保証人と

本人代理権者から、書面で申請があった、と言った。家財の搬出業者も、すでに、手配済みだ、と言った。

俺は、ドバイの父に、国際電話をかけた。

父は、衛から事前に説明を受けていた、と答えた。「お前の体調管理のため、衛くんと暮らした方がいい」と。

民法上、無効を主張できる類の申請だった。法学部4年の俺なら、書面を一つひとつ崩せた。

崩した先で、俺を待っているのは、衛の家しか、なかった。

退去日は、今日だった。

「冷蔵庫に、お前の好きなヨーグルトを買ってある」

衛が言った。

俺は半秒、足を止めた。

飲むタイプの、加糖ゼロのやつ。柔道部時代から毎朝飲んでいたやつだ。

中学のときから一緒に住んでいたわけでもない男が、なぜそれを知っているのか。

母が言ったんだろう。それ以外の経路はない。

なら、それでいい。

俺はボトルを握り直して、玄関をまたいだ。

2階の客間に通された。

6畳ほどの、生活感のない部屋だった。

ベッド、机、空のクローゼット。窓は二重ガラス。鍵は内側についていない。

あとで考えれば、これも装置のひとつだった。

「荷物を置いたら、1階の診察室に来てください」

衛が階段の途中から言った。

「在宅療養プロトコルの説明があります」

俺は振り向かなかった。

「俺は患者じゃねえ」

「説明だけです」

声に抑揚がなかった。

苛立つほどの感情も乗っていない。事務連絡を読み上げる声だった。

俺はスーツケースを開け、着替えだけを取り出した。

司法試験の参考書。柔道部のOB会の写真。母が選んだネクタイ。

全部が、まだ俺のものだった。

そのはずだった。

1階の診察室は、開業医のものとしては広い方だった。

白い壁、観葉植物、シンプルなデスク。電子カルテのモニターが2つ並んでいる。

受付の女性は既に帰っていた。閉院後の午後だった。

「座ってください」

衛が革張りの患者椅子を指した。

俺は座らずに、デスクの上のクリアファイルを見た。

2通の書類が、上下に重ねて置かれていた。

「医療代理同意権付き生活支援委任契約書」

「金銭管理委任契約書」

どちらも、公証役場の印が押されていた。

日付は半年前。両親が日本を発つ前日。

双方の控えが、両方とも衛の手元にある。

俺はクリアファイルを指で押し戻した。

「これ、見たことねえぞ」

「父さんが、お前に渡す時期は俺に任せたそうです」

「……」

父さんと、衛は言わなかった。

「父さん」は、衛にとって他人の呼称だ。

俺はそれを口にする違和感に、一瞬だけ氣を取られた。

書類は、法学部4年の俺には全部読めた。

「医療代理同意権」って書いてある。本人が判断できないとき、代わりに医者 of 指示にOKを

出せる権限のことだ。本来は意識のない患者向けの仕組みだった。

俺は健康な22歳の成人だ。

なのに、両親が日本にいないあいだ、衛がこの権限を持つ。

金も同じだ。両親からの生活費は、全額、俺の口座に振り込まれる。

俺が自由に動かせる金は、ゼロだった。

かつての俺なら、この書面の条項を1行ずつ精査して詰めただろう。

予備試験対策で民法も商法もやってきた。

こんな契約、本人が拒否すれば解除できる。

手続きも頭に入っている。

だが、今の俺には、署名以外の選択肢が物理的に存在しない。

帰る家がない。

動かせる金がない。

両親に「告発したい」と言えば、家族が2度目の崩壊を迎える。

父はようやく母と「家族になれた」と笑った。
再婚式で、衛と握手していた。

あの笑顔を、俺は知っている。

俺はペンを取った。

2通分、署名した。

書類は衛の手で揃えられ、デスクの引き出しに入った。

鍵の音がした。

衛が、白衣のポケットから万年筆を抜いた。

キャップを開けた。

乾いた、低い音がした。

なんでもない音だった。記憶に残るような音ではない。

そのはずだった。

「では、初回の身体測定に入ります」

衛がモニターを操作した。

新規カルテが立ち上がった。

画面に「主治医：衛」「在宅療養患者：朔」と表示されていた。

俺の名前の下に、空欄が並んでいる。

身長、体重、血圧、体温、ペニス長、射精量、勃起時間。

俺は椅子から立ち上がった。

「待て。なんだその項目は」

「持病の在宅療養プロトコルに必要なデータです」

「俺に持病はねえ」

「ご両親への提出書類には、慢性疲労症候群および高血圧予備群と記載してあります」

「……は？」

衛が、デスクから書類を1枚抜いた。

両親宛ての健康診断書の控えだった。父と母の署名欄に、確認印が押されている。

書面は、半年前の日付だった。

俺の知らないうちに、俺は「持病持ち」になっていた。

「服を脱いでください」

衛の声に、命令の抑揚はなかった。

業務連絡だった。

俺は親指の関節を鳴らした。

試合前の癖だった。

柔道部時代、組み合う直前にいつもやっていた。

心拍を整えるためじゃない。逃げないと自分に言い聞かせるためだ。

「触んな」

「測るだけです」

「だから触んなって言ってんだろ」

「ご両親に毎月、健康データを送付する契約です」

衛が万年筆をデスクに置いた。

キャップは開いたままだった。

ペン先が、蛍光灯の下で光っていた。

「お前が拒否すれば、ご両親に『朔の体調管理ができない』と報告します。心配したご両親が早期帰国するかもしれません。父さんの赴任は失敗します」

俺は息を吸った。

吐けなかった。

父の顔が浮かんた。

ドバイ赴任は、商社マンとして父が取った最後のチャンスだった。

次の人事で帰国組に入るための、勝負の1年。

俺はそれを知っている。母から聞いた。

俺はTシャツの裾に手をかけた。

1枚ずつ、脱いだ。

Tシャツ。デニム。ボクサーパンツ。

衛は何もしなかった。ただモニターの前で立っていた。

計測機器を準備する音だけが、診察室に響いた。

「身長計に乗ってください」

俺は乗った。

目盛りが俺の頭頂部で止まった。

「178.3cm」

衛が万年筆で書いた。

次に体重計を指した。

「72.1kg」

書いた。

次に血圧計。

次に体温計。

衛が、メジャーを取った。

俺の胸を、後ろから前へ、巻いた。

冷たいビニール製のメジャーが、汗ばんだ胸
板に、貼りついた。

「胸囲、96cm」

書いた。

次に俺の腰に、メジャーを巻いた。

「腹囲、74cm」

書いた。

最後に俺の太ももの付け根に、メジャーを当てた。

「太もも周囲、56cm」

書いた。

次に。

「ペニス長を測ります」

俺は息を止めた。

「冗談だろ」

「項目に含まれています」

衛が、メジャーを持って俺の前にしゃがんだ。

白衣の襟が浅く開いて、首筋が見えた。

俺の半歩ほどの距離で、衛は俺の性器に触れた。

冷たい指だった。

「14.8cm。平常時」

書いた。

俺の身体の中で、何かが効かなかった。

柔道なら、効かなければ態勢を立て直すだけだ。

だが今、俺は素っ裸で診察台の前に立っている。

立て直す態勢が、もうない。

診察台に、ペーパーシートが敷かれた。

「うつ伏せに」

衛が言った。

俺は動けなかった。

「うつ伏せです」

「……ちっ」

舌打ちをした。

拳を握って、診察台に上った。

うつ伏せになると、首の後ろが無防備になる。

高校3年のとき、絞め技で締められた古傷が
そこにある。

筋ではなく、神経の浅いところに痕が残って
いる。普段は何でもないが、強く押されると鈍

く痺れる箇所だ。

俺だけが知っている弱点だった。

衛の指が、その上に置かれた。

俺は呼吸を止めた。

止めたつもりだった。

肩が、勝手に跳ねた。

「ここ、古傷がありますね」

「……関係ねえだろ」

「身体の特異点はカルテに記録します」

万年筆の乾いた音がした。

キャップが、また開かれた音だった。

俺の腰の奥で、何かが竦んだ。

なぜだか、よく分からなかった。

「直腸温を測ります」

衛が手袋をはめる音がした。

ゴム手袋の、すれる音。

俺の尻に、冷たいゼリーが塗られた。

「リラックスしてください」

「できるかよ」

体温計の先が、押し当てられた。

太くはない。だが、形が悪かった。

俺の身体の中に、異物が入った。

「ん……っ」

声が、出た。

出したつもりは、なかった。

俺は枕に顔を埋めた。

数十秒、衛は手を動かさなかった。

電子音が鳴った。

「直腸温37.6度。やや高めです」

「……」

「治療プロトコルに反映します」

衛が体温計を抜いた。

俺の中に、それが入っていた感覚だけが残った。

まだ何かが入っているような気がして、腰が動いた。

衛の手は、抜かれていなかった。

別の指が、まだ俺の中にあった。

「触んな」

「前立腺の所見を取ります」

「触んなくて……っ」

「動かないでください。腸壁を傷つけます」

衛の指が、俺の腸の浅い場所を押した。

腹側の、ちょうど内側の塊だった。

前立腺、と頭の中で名前が浮かんた。

腹の奥で、知らない筋肉が縮んだ。

俺のペニスが、勝手に立ち上がった。

ありえないことだった。

俺は今、義兄の指で腸の中を探られている。

不快なはずだった。

屈辱のはずだった。

なのに、勃った。

「血流良好。前立腺触知正常」

衛がカルテに書いた。

万年筆の音。

俺の腰が、その音で跳ねた。

なぜだ。

なぜ、ペンのキャップが開く音で、俺の身体
が反応する。

わからなかった。

わからないまま、衛の指が動き続けた。

「うっ……あ、っ」

「経過観察用に、初回の射出を採取します」

衛が、デスクからカップを取った。

計量目盛のついた、透明なカップだった。

俺のペニスの先に当てた。

冷たいプラスチックの感触。

「あっ……やめ、っ」

「協力をお願いします。データが必要です」

衛の指が動いた。

2本の指で、俺の中の同じ場所を押し続けた。

俺は枕を噛んだ。

声を殺そうとした。

殺しきれなかった。

「く……っ、う……っ」

「リラックスを。射出が遅れます」

「黙れ……っ」

「あと数十秒です」

衛が腕時計を見た。

俺の脈を取っているふりだった。

数えていない。

数えていないのを、俺は感じた。

なぜ感じたのかは、もう考えられなかった。

「く、う、あっ……」

俺は射精した。

義兄の指で、腸の中を押されて。

カップに、俺の精液が落ちた。

1度、2度、3度。脈打つたびに出た。

最後の1滴が落ちるまで、衛は指を抜かなかった。

「12.4mL」

衛が、カップの目盛を読んだ。

万年筆で書いた。

俺の射精量は、数字になった。

俺の中の何かが、数字になった。

「味見をしてください」

衛が、カップを俺の前に差し出した。

「は？」

俺は身体を起こした。

ペニスがまだ反り返っている。

息が整わなかった。

「味で異常がわかる症例があります。糖尿病性、亜鉛欠乏性、感染症性。最初に基準値を取っておきます」

「ふざけんな」

「ご両親への報告書には、味覚検査も項目があります」

俺は衛を見た。

黒縁の眼鏡の奥の目は、笑っていなかった。

苛立ってもいなかった。

ただの業務だった。

俺の絶望が、向こうには見えていなかった。

「……っ」

俺はもう一度、拳を握った。

関節は鈍く痛んでいた。

俺はカップを受け取った。

指が震えていた。

唇に当てた。

舌を、先だけ出した。

「奥まで」

衛が言った。

俺はカップを傾けた。

俺自身の精液が、口の中に入った。

生臭くて、苦くて、塩辛かった。

吐き気がした。

飲み込まなかった。

舌の上で止めた。

「飲んでください」

「……ぐ」

俺は飲んだ。

喉が動いた。

自分の身体の中を、自分の身体の中に戻した。

「味の所見をどうぞ」

「……苦い」

「ほかには」

「……塩、っぱい」

「正常範囲です。基準値として記録します」

万年筆の音。

俺の腰が、また跳ねた。

「もう1度、採取します」

衛が、俺の前にひざまずいた。

手袋を外していた。

素手だった。

俺のペニスを、直接握った。

「待っ……っ」

「再現性のあるデータが必要です。1回だけでは値が安定しません」

衛の指が、俺のペニスに巻きついた。

医者の手だった。

長くて、骨ばっていて、温度がなかった。

動き出した。

一定のリズムで、上から下に。

俺の中の何かを、引きずり出すような動きだった。

「あ、っ、あ……っ」

「呼吸を止めないでください。心拍に影響し

ます」

衛の左手が、俺のうなじに置かれた。

古傷の上だった。

親指が、軽く押された。

俺の腰が、勝手に跳ねた。

ペニスが、衛の手の中で限界まで張り詰めた。

「ここを押すと、勃起が強くなりますね」

「触んな、そこ……っ」

「メモします」

万年筆の音。

また、俺の身体が反応した。

もうわからなかった。

古傷なのか、キャップ音なのか、衛の手なのか。

全部が、俺の中で混ざっていた。

衛の手の動きが速くなった。

俺の先端から、透明な液が垂れていた。

糸を引いて、衛の手首まで伝った。

「うっ、ぐ、っ……あ……っ」

「もうすぐです」

衛が、計量カップを構えた。

俺のペニスの先に、また当てた。

「は、っ、あ……っ、ああっ……」

俺は射精した。

2回目だった。

最初より精液の量は少なかった。

だが、勢いがあった。

カップの目盛が、白い精液で曇った。

「8.2ml。1回目との比較で、約34パーセント減」

衛が書いた。

俺の射精量は、2回目で、減った。

その減り方も、数字になった。

俺の身体は、もう俺のものではなかった。

誰かのカルテだった。

「では、本日の処置は以上です」

衛が、万年筆のキャップを閉じた。

カチリ、という音がした。

開く音とは違う音だった。

俺の身体は、もうその音にも反応していた。

「お疲れさまでした。シャワーをどうぞ」

衛がタオルを差し出した。

白い、新品のタオルだった。

タグがついたままだった。

俺のために用意されていた。

いつから、それを知っていたのか、考えるのをやめた。

シャワー室は2階にあった。

お湯が出た。

俺は身体を洗った。

うなじを擦った。

古傷の上を、強く擦った。

痕は消えなかった。

俺は今日、なにをされたのか。

法学部生として、整理しようとした。

無理やりだ。完全に犯罪だ。

だが訴えるには、まず証拠を集めなきゃなら
ない。

病院に診断書を取りに行く必要もある。

弁護士のコネもある。

全部、両親が日本にいる前提で考える話だった。

両親に話せば、家族は2度と元に戻らない。

父の赴任が失敗する。

母が泣く。

再婚式の写真の笑顔が、俺の頭から離れなかった。

俺は両親を、愛していた。

愛していたから、訴える道は、シャワーの排水口に流れて消えた。

シャワーの音だけが、浴室に響いていた。

俺の名前は、今日、カルテに登録された。

「在宅療養患者：朔」。

「主治医：衛」。

短い記載だった。

それだけで、俺の身体は誰かのものになった。

俺は親指の関節を鳴らした。

関節は、もう鳴らなかった。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

義兄医師に毎日アナル処置される柔道部4年の在宅療養カルテ